竹山研究室— 驚きと喜びの場の構想 —

TAKEYAMA Laboratory – A place full of JOY and WONDER –

桂キャンパスに潤いを

本年度の竹山研究室のスタジオ課題は、私達が日ごろ勉学に勤む京都大学桂キャンパスを対象とするものである。初回ゼミにて、竹山教授より課題の要件が伝えられた。

『ともすれば殺風景とも評されることの多い桂キャンパスに、驚きと喜びに満ちた魅力的な場所を構想せよ。』

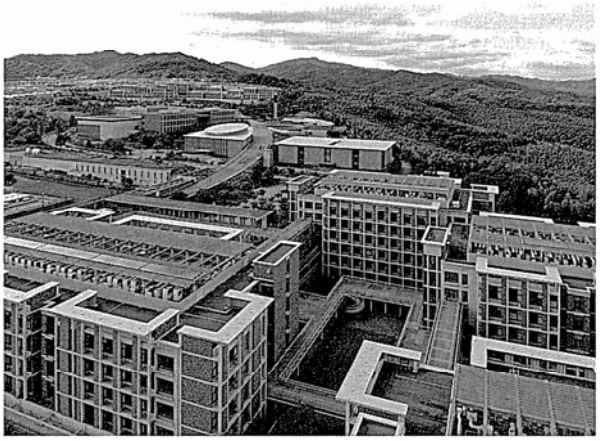
桂キャンパスは2003年にできた比較的新しいキャンパスであり、工学研究科が位置している。A、B、C、Dの4つのクラスターで構成されるが、当初予定された情報学研究科の移転は進んでおらず、手つかずの雑木林や竹林が広がっており現状は立ち入り禁止である。南端部から北端部までは約70mもの高低差がある上、公道によって各クラスターが分断されているが、緩やかな勾配のヒルトッププロムナードによってクラスター間のスムーズな連絡が意図されている。キャンパスの北西部にはニュータウンがあり、地域住民と大学の共生が求められている。

建物はコンクリートとレンガタイルの外観が特徴的で、それらはおよそ南北のグリッドに沿って配置されている。屋外の通路の多くはコンクリートの列柱で囲われ、厳格な雰囲気が漂う。キャンパスが広大なため、建物は余裕を持って配されており、いたるところに広場や空地が見られる。

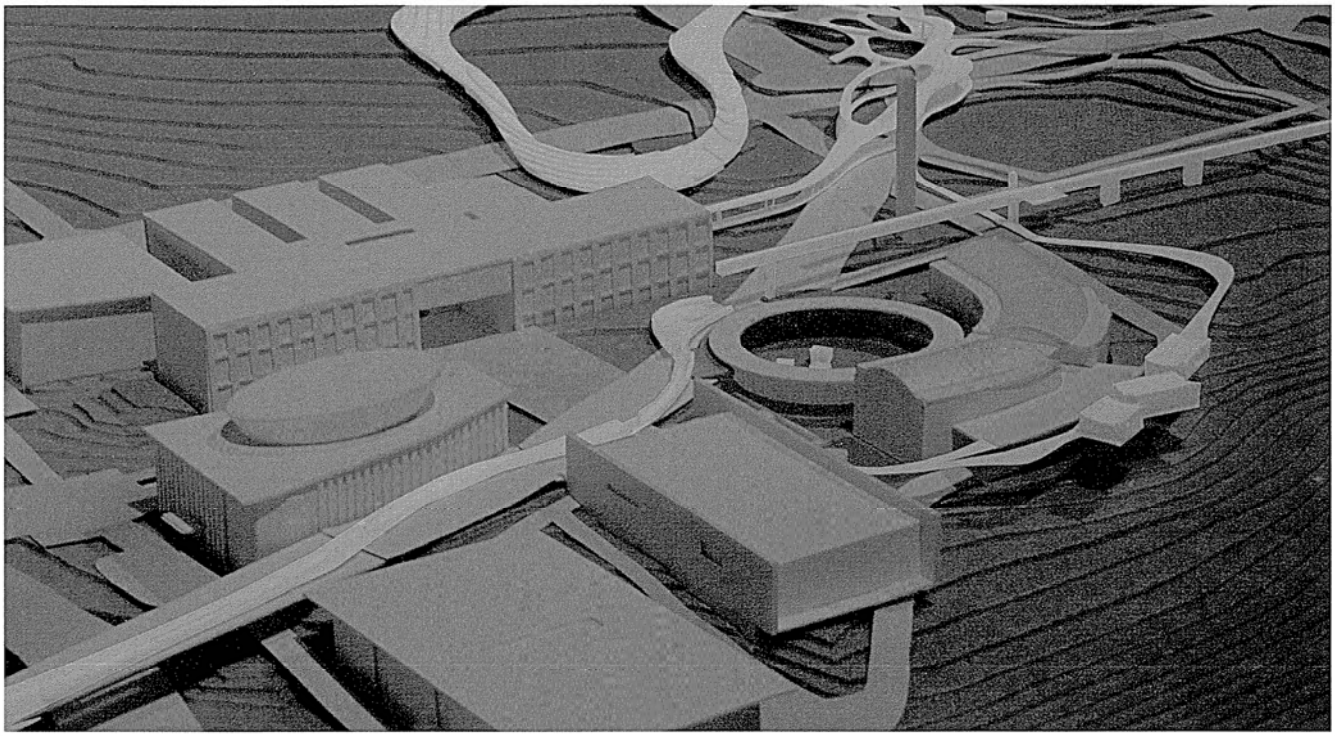
しかしそれら広場や空地が豊かに使われているとは言えないのが現状だ。広すぎる屋外空間は閑散とし、秩序立った建物がその侘しさを助長するかのようである。大学としてもそうした現状を打開すべく、地域住民や学外の人々にも親しまれるキャンパスを目指す努力がなされているが、いまだ結実していない。そもそも、多様な人々の多彩な行為を引き起こすには、その土台となるスペースが豊かで親しみやすいものでなくてはならない。しかし桂キャンパスの厳格な空間は、人々の多様性を拒むかのようである。私達は本スタジオ課題に取り組むにあたり、堅苦しい今の桂キャンパスを柔らかくほぐそうと試みた。

閑散としたヒルトッププロムナード。

Bクラスターのロトンダ。



上空より。手前からA、B、Cクラスター



全体模型模型写真。B クラスターより C クラスター方面を見る。

交差点、境界領域

桂キャンパスの広場や空地を、豊かなパブリックスペースとして再生させたい。多様な人々が思い思いに利用し、交流することも一人佇むこともできるような場になることを目指して計画は進められた。話が進む中、ある日のゼミで日本における「庭」の概念について、竹山教授よりお話があった。

「市場」はかつて「市庭」と表記されていたそうだ。「庭」とは誰にも属さない場所であり、様々な共同体に出自を有する多様な人々が出会う場所であった。庭がそのような場所として機能しえたのは、特定の共同体に所属しない境界領域として存在していたからである。

この議論を経て、各学生の対象敷地は桂キャンパスに散在する境界領域から、つまり誰にも属していない場所から選定することとし、人と人、あるいは人とモノ、自然、風景、情報などが出会うための場、交差点として計画することが主軸となった。

個人と集団を横断する

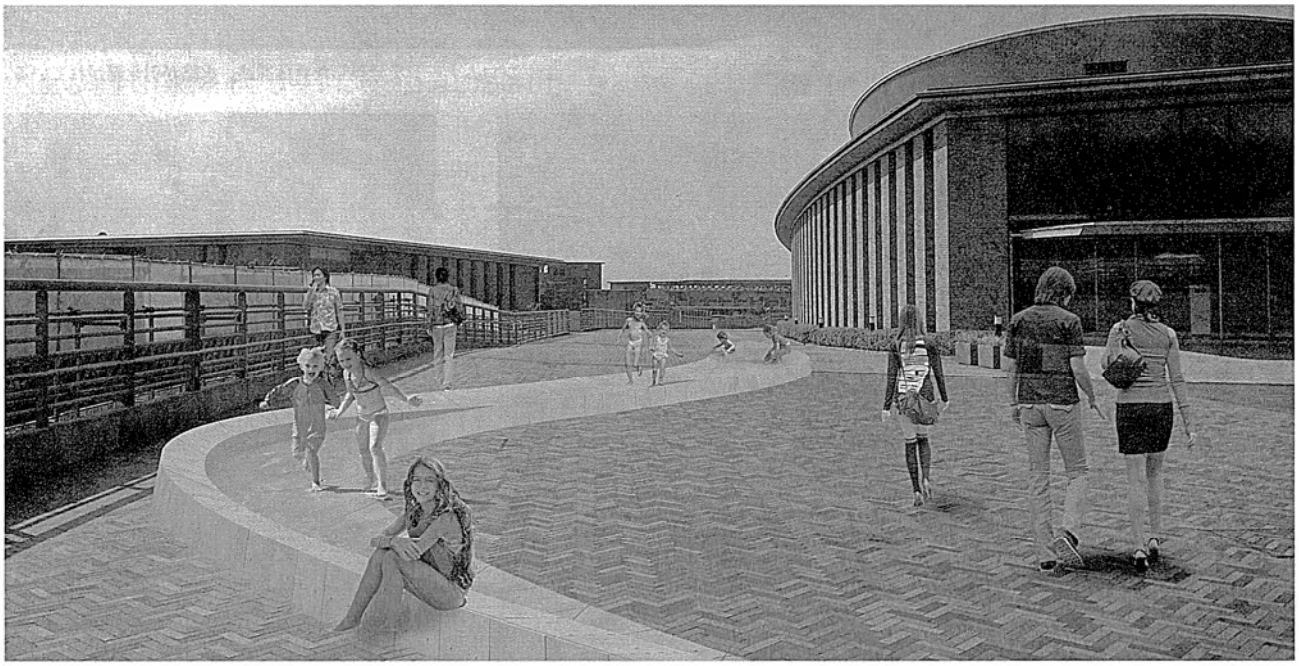
計画を行うにあたり、通常の大学設計で行われるようなマスタープランから部分へと解像度を上げていくプロセスではなく、全く逆の進め方を採用した。つまり、現状の桂キャンパスのいたるところに見受けられる局所的な問題に対して別々の解決を施し、それらが重なり合うことで桂キャンパスの新たな全体像を構築しようとしたのである。部分に対してそれぞれ最適な解を与えていくことで、利用者にとって親しみやすい桂キャンパスを実現できると考えた。スタジオ課題に取り組む学生たちは各々敷地を選定し、問題提起から提案までを個々に行う。個人で設計しながら、他の学生の提案と関連、時には譲り合いをしながら自身の提案を洗練してゆく。そのようにして部分から全体へと計画を発展させていった。

例えば、人を呼び込む銭湯やゲストハウスを提案する学生もいれば、滞った動線を滑らかにつなぐための道を提案する学生、人のよりどころとなるような水辺を提案する学生など、その提案内容は多岐にわたった。それらは時間を経るにつれて交ざり合い、次第に桂キャンパスの全体像として浮かび上がるようになる。大人数で同じ課題に取り組むという竹山研スタジオ課題の特性を活かし、個人と集団を往来しながら設計に取り組んだ。

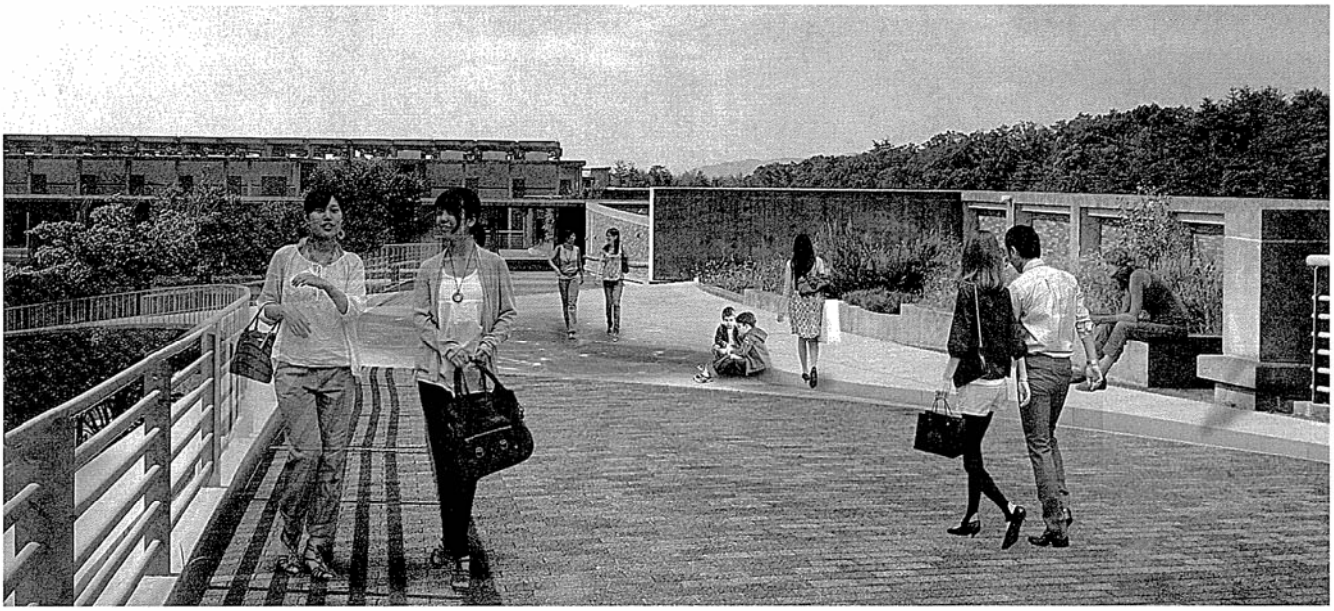
フィールドワークの様子。互いの敷地で提案を確認し合う。

D-02 キャンプサイト
D-01 銭湯
C-05 緑
C-03 ギャラリー
C-04 テラス
C-02 道と屋根
C-01 歩道橋
B-03 ゲストハウス
B-02 家具式東屋
B-01 親水空間
A-03 フォリー
A-02 立体通路
A-01 劇場

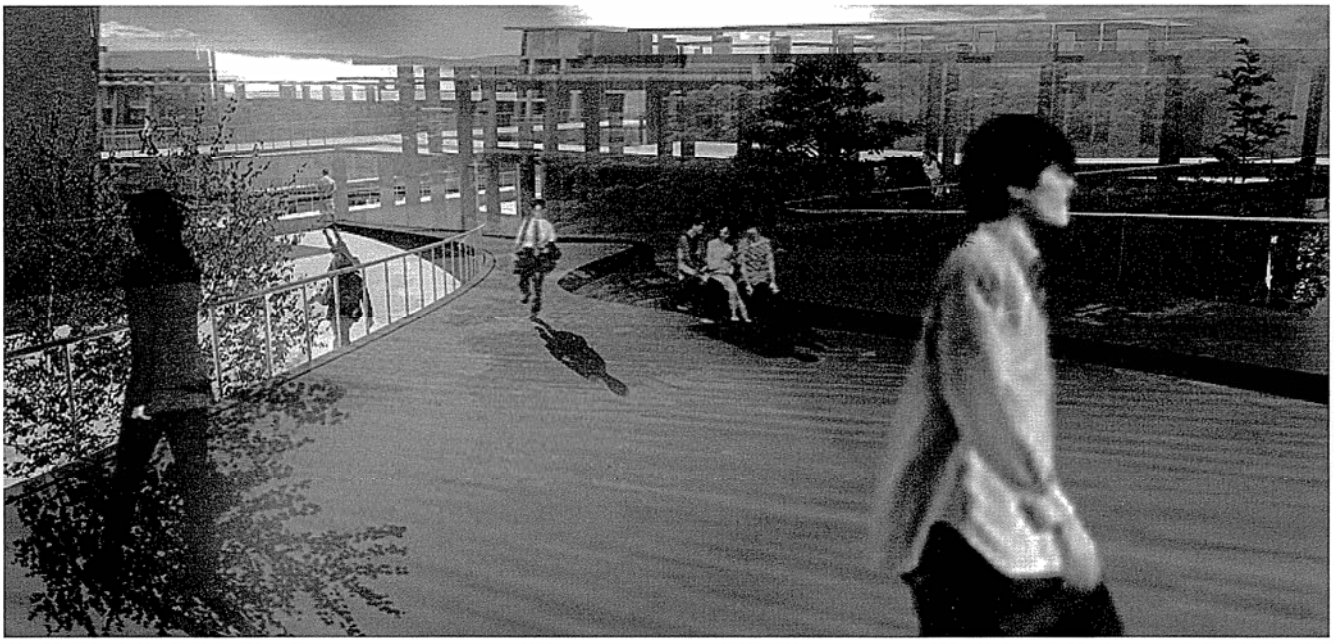
全員の案を重ね合わせた全体配置図。S=1:5000



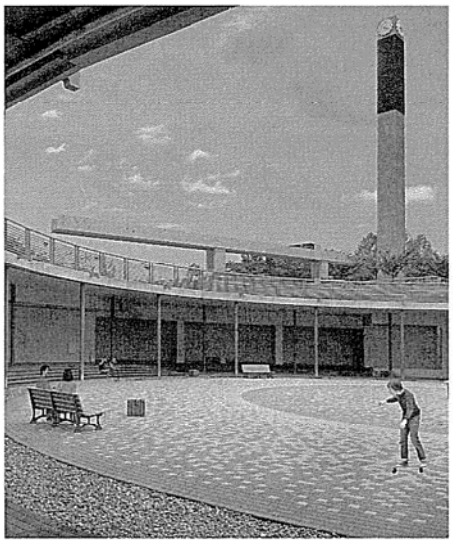
ヒルトッププロムナードを流れる水路の提案



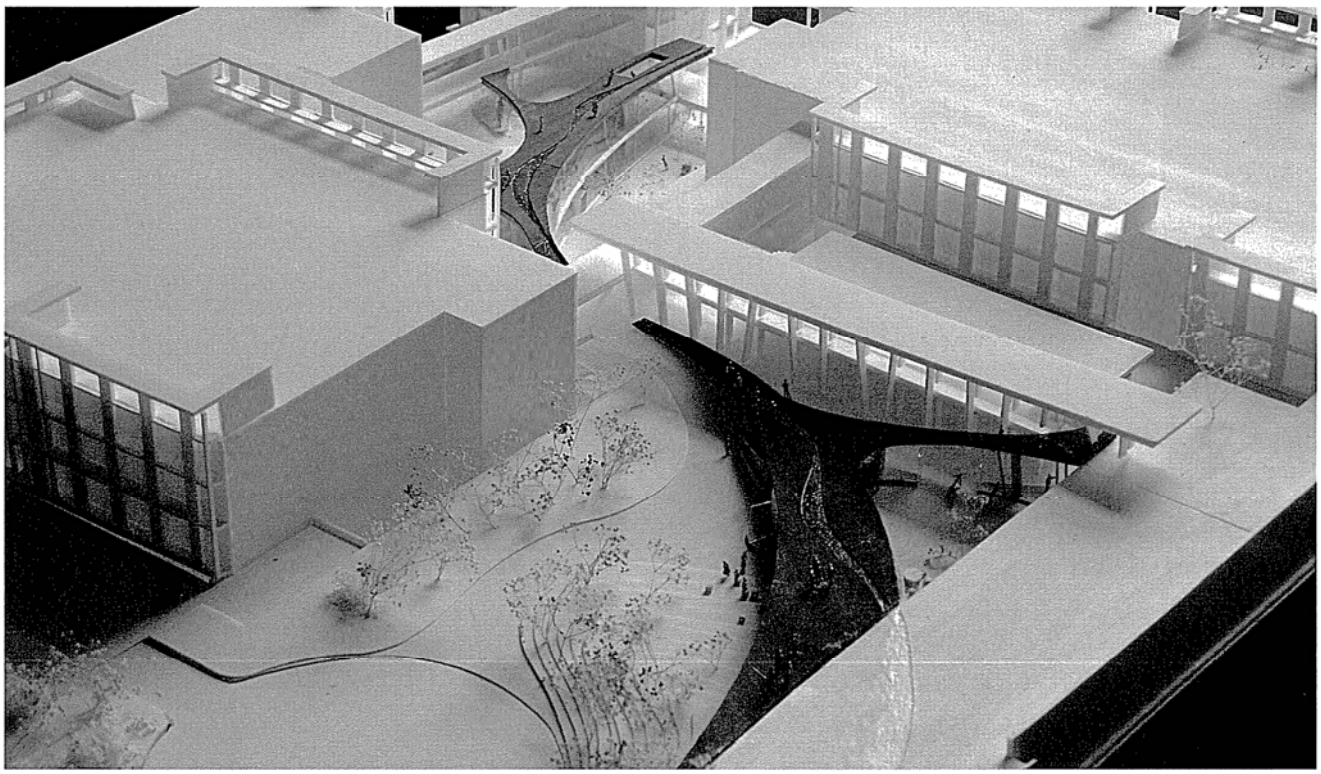
水路の縁の高さや幅を変え、プロムナードに抑揚を与える。



プロムナードを延長した立体通路。水路が引き継がれている。



左：A クラスター中庭。立体的な溜まり場の提案
右：新たなシンボルとなる水道橋。B クラスターのロトンダより見る。



Aクラスター立体通路模型写真。北側より見る。

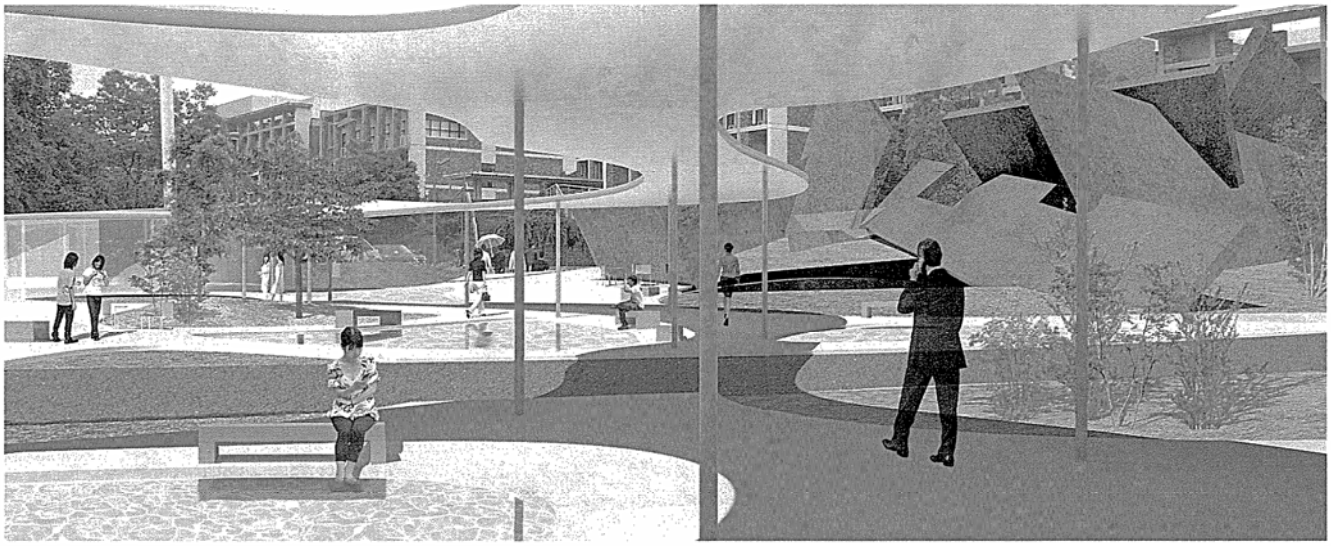
他者との関わり

ここからは、具体的な設計の内容にも一部触れながら説明していく。先述の通り、個々のプロジェクト同士は互いに関連し合いながら共存している。そして学生によっては一箇所あるいは複数箇所に集中して建物を設計する者、広範囲にまたがる緩やかな場の構想をする者、あるいは敷地を設定せず可動式の屋台を設計した者など、敷地の規模は異なった。多様な案が複雑に交錯し合うことで本計画の全体像は成り立っている。

ある学生は「水」をキーワードに場を計画した (B-01)。桂キャンパスの広大なヒルトッププロムナードの上を蛇行しながら流れる水路をつくり、親水空間を生み出すというものだ。水路の縁はその高さや幅を徐々に変え、単調だったプロムナードの風景に潤いと抑揚を与える。水辺には人々だけでなく、鳥が止まったり、周りの山に住む動物や水辺を好む昆虫も集まるかもしれない。水は北側、つまり標高の高い側から供給され、桂キャンパスの軸上をまっすぐ水平に伸びる水道橋を流れてBクラスターのヒルトッププロムナード上の水路へと落ちる。水道橋は、桂キャンパスのシンボルであるプレストレストコンクリートの時計台と呼応し、新たなランドマークとなるだろう。

一方、B、Cクラスターの間には市が所有する御陵公園が挟まれている。そのためここではプロムナードが途切れている。ここは学内の動線と公園利用者の交差点であるが、人はそれぞれの目的地へ向かってよそよそしくすれ違うばかりで、交差点はぽっかりと空いた誰のものでもない場所になっている。つまり交流を促すことはおろか、何者も受け付けない場所になっているのである。ここを誰のものでもある場所にするため、交差点とその周囲を広場として一体的に計画する提案があった。広場内には、学生や教員のスムーズな移動を可能にする歩道橋（C-01）や、多様な人々が場所を共有するための絡み合う道（C-02）、広報のためのギャラリー（C-03）、京都市を一望できるテラス（C-04）、立体的な緑の空間（C-05）が複数の学生によって個々に提案され、互いの場のイメージを共有しながらまとまりとして計画された。また、ここでは先ほど述べた水の提案と対応するように各所に池が設けられている。

また、南端のAクラスターでも水の連続によって案が重なり合っている（A-02、B-01）。本キャンパスの主要動線であるヒルトッププロムナードは、三つのクラスターを大きな弧を描きながら結んでいるが、Aクラスターに入ると突如として途切れてしまう。Aクラスターには建物4階分の高低差があるものの、上下の移動を担う階段は建物の陰に隠れていて薄暗い。幅も人がすれ違える程度のささやかなものである。ある学生はAクラスターのプロムナードを緩やかに延長してキャンパス全体の繋がりを強めながら、中庭にはその高低差を活かして立体的なカフェや多目的スペースを提案した（A-02）。立体通路上には、ヒルトッププロムナードを流れる水路がそのまま引き継がれ、中庭では立体的な空間構成を活かした滝や水路へと変化している。



Cクラスターの広場の提案。ところどころに池が配されている。

このように、一人の学生の提案が他者へと影響し、また新たに生まれた場に対応して元の学生の提案も変化している。最初に提案された時はばらばらだった案が歩み寄ることで徐々にまとまり、新たな全体像がつくられていった。

また建物同士の関係性だけでなく、提案するキャンパス生活も学生間で繋がっていった。未開発のDクラスターに、銭湯を計画した学生がいた（D-01）。Dクラスターには竹林が広がっており、竹を活かしたアプローチや風呂場、休憩スペースが計画されている。学校とニュータウンから二つの軸線が引かれ、その交差点にこの銭湯は位置しているが、銭湯という機能の特性上この建築はあまり開放的なものではなく、他から隠れるようにして建っている。地域軸を進んでいくと最初は竹林に囲まれているが、視界は徐々に根元から竹の葉へ移り、軸の終点では嵐山方面を望む風景がひらく。階段を降りると竹林に囲まれた銭湯があり、竹に囲まれた非日常的な空間で研究や日ごろの疲れを癒すことができる。またこの提案と関連して、銭湯の近くには京都大学関係者用のゲストハウスと一般向けのキャンプ場の複合施設も提案されている（D-02）。京都大学やニュータウン、ゲストハウスとキャンプ場の複合施設、そして銭湯が生活の一連の流れとして繋がっている。

Dクラスターの竹林

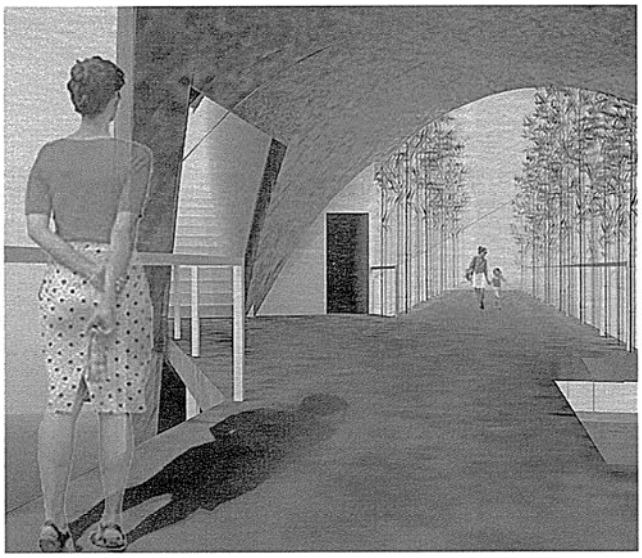
驚きと喜び溢れる場

本スタジオの成果物は企画書としてまとめられ工学研究科に提出される。各案は先述の通り独立かつ連続している。部分的であっても段階的に実現され、桂キャンパスに寄与できることを私達は期待している。

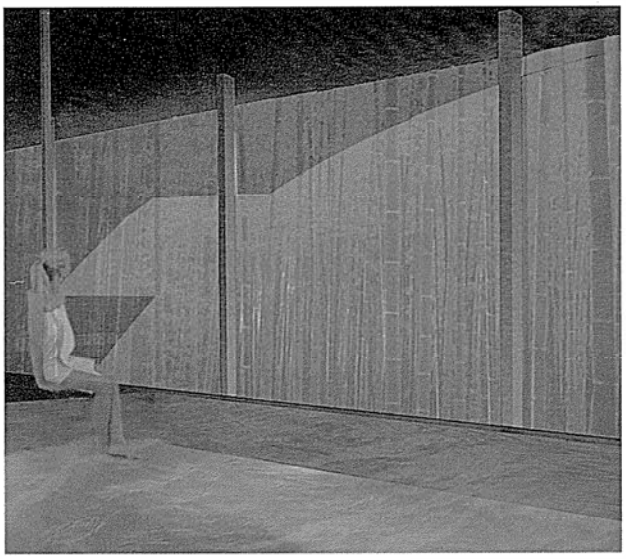
本計画における部分と全体の在り方は複雑系から着想を得たものである。複雑系とは、生命や社会、物質などの複雑で予測不能な挙動を科学するものであり、その根底には全体は部分の総和以上であるという考え方がある。逆に、全体は構成する部分の性質には還元しきれない。本計画においても同様なことが言えよう。桂キャンパスの全体像は各学生の個別の案には還元できない。個別の案も全体には包含されない豊かな特徴を持っている。

関連することはただ連続することではない。むしろいかにして独立するかということが重要なのではないか。そして独立したもの達の多様性によって生まれる変化や抑揚や連続に、人は驚きと喜びを感じるのではないだろうか。本計画は設計者集団に内在する他者性によって、豊かな経験を創造しようと試みたものである。

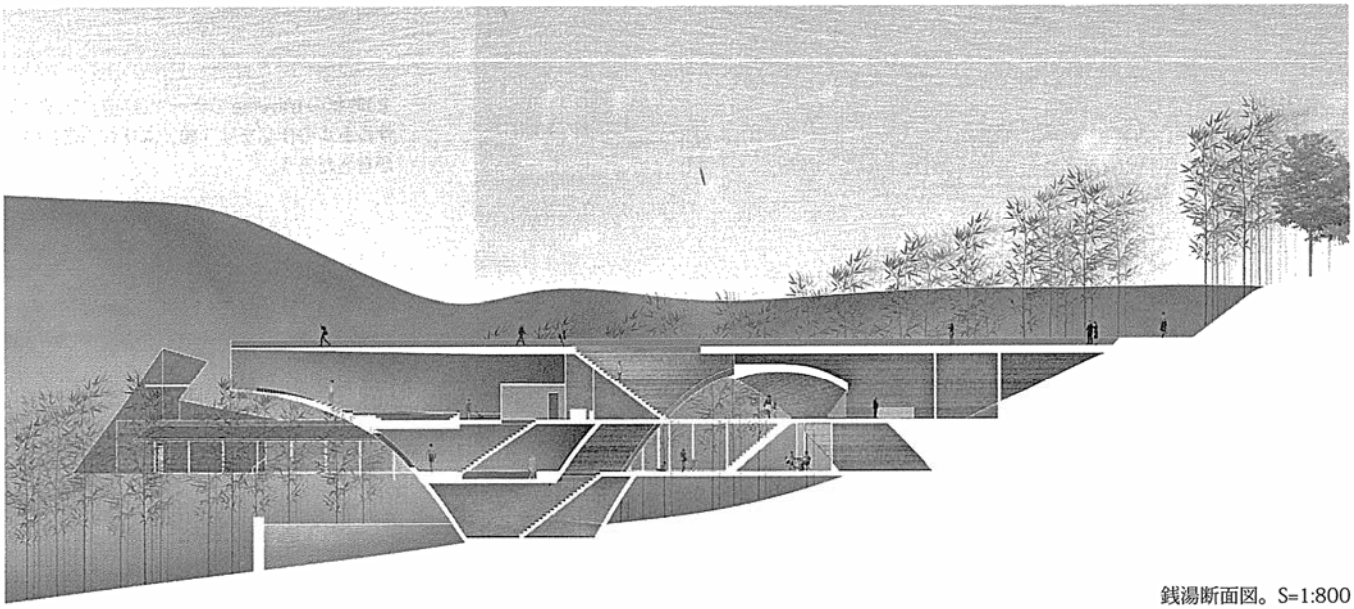
＜参考文献＞
『無縁・公界・楽－日本中世の自由と平和』（平凡社ライブラリー、1996）
『ガイドツアー複雑系の世界－サンタフェ研究所講義ノートから』ミッチェル・メラニー著 / 高橋洋訳（紀伊国屋書店、2011）
『複雑系を哲学する：「生成」からとらえた「存在」と「認識」』小林道憲（ミネルヴァ書房、2017）



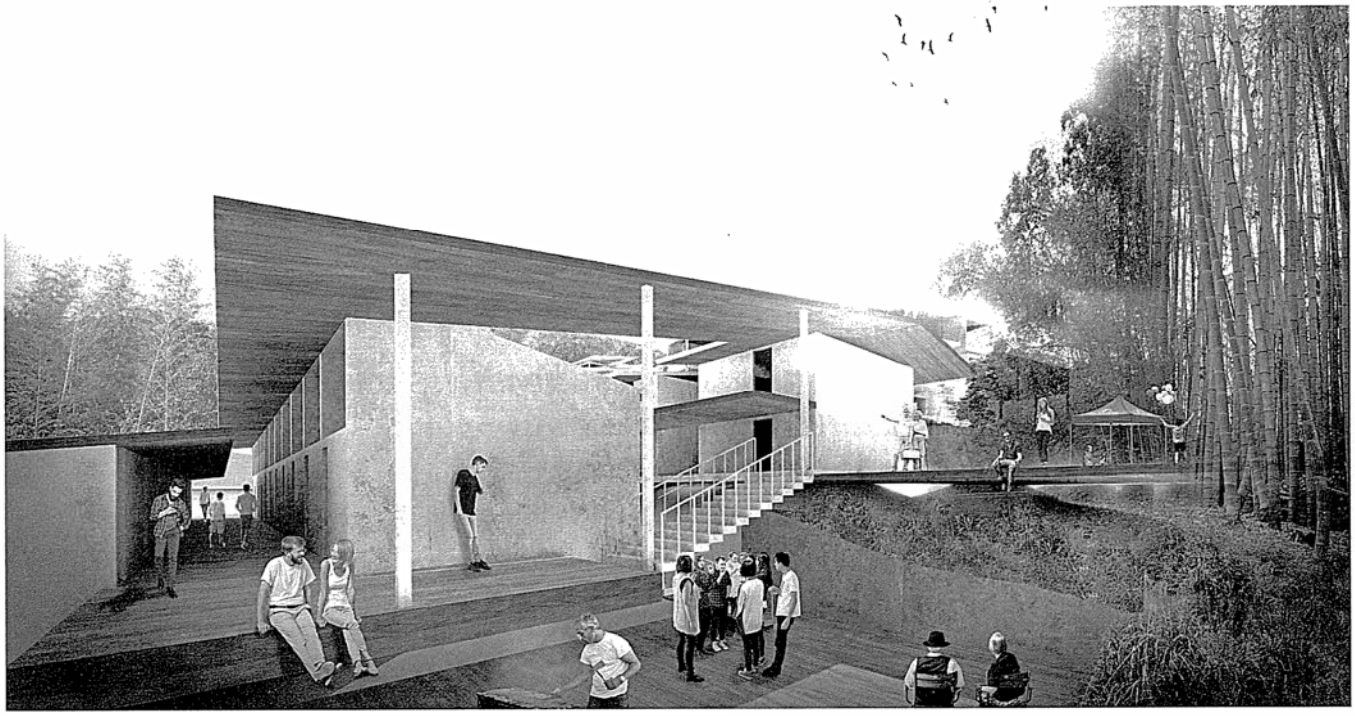
地域軸と大学軸の交差点。銭湯のエントランスホール



銭湯内観。竹に囲まれた浴室



銭湯断面図。S=1:800



ゲストハウスとキャンプ場の複合施設外観。